



写真左:エベレストでの清掃登山、写真中央・右:富士山での清掃活動(野口健事務所提供)

キャンペーンが、今となっては大体年間7,000人ぐらいですか、もう日本中から集まる。みんなでごみを拾って、その後国や県、地元の市町村や企業が入ってきて、この輪が大きくなるわけです。20年で富士山のごみはほとんど無くなりました。やっていることは、手で拾ってだけです。でも温暖化もそういうことだと思うんです。「電気をパチパチ消すといっても、本当にこれで温暖化に貢献できるのかな」と思うかもしれませんが、1億2,000万人がやれば大きな削減になるし、それが世界中の国に広がればいいですね。

■ 解決の鍵は、まず自分の周りの自然を知ること

藤井 市民レベルで環境問題を考えるためには、どのようなことから始めたら良いでしょうか。

野口 いろいろあると思うんですけど、自分の住んでる所の自然を知って欲しいです。例えば白山(石川・岐阜県)という山があります。白山は日本百名山なので、すごい混んでるわけです。たくさん人がいるんですけど、ごみが落ちてないんですよ。僕は富士山でずっとごみを拾ってきていたので、人がたくさん登っているという、イコールごみがあるという見方をしちゃうんです。で



も探しても無いんですよ。山小屋のおじさんに「この山は人がいっぱいいるのに、ごみが落ちてないね」と聞いたら、「この白山は、地元の登山者が多いんだよ」と言うんです。

藤井 地元の登山者が多いから、ごみが落ちていない?

野口 そうです。登っているときに、上からたくさんの方が降りてきてすれ違うじゃないですか。目が合うとあいさつしてくれるんですけど、そのときに何人の方が「ようこそ白山へ」って言ったんです。山って、すれ違うと「どうも、こんにちは」と声を掛けるんですね。ところが「ようこそ」という言葉を使うのはあまりないんです。が、白山はそれが出るんです。県外からの登山者がごみを捨てても、県内の登山者が目の前で拾うので捨てられない雰囲気がある。地元の人が多いから白山はきれいに守られていることを知ったときに、あの「ようこそ」は、「自分たちの白山に、野口さんようこそ」という意味だったんだと気付いたんです。

地元で愛されてる山はきれいだし、そうでない所はやっぱりごみが多い。僕は白山がすごい大きなヒントになったなと思いました。その地域地域で自分たちの住んでる所が「美しい」とか「いいところだよな」というのがないと、「守りたい」につながっていかないと思うんです。

藤井 本当に良いご指摘だと思います。私たちも利根川と小貝川という河川を愛していますから、いくつかの団体が清掃活動をしています。また、団体を中心にみんなに呼び掛けて河川敷の清掃活動を行い、きれいな状態をキープできるようにしています。



取手市民憲章推進協議会による利根川河川敷の清掃活動

■ 一人ではできないが、みんなでやれば大きな輪に

藤井 最後に、市民の皆さまにメッセージをお願いします。

野口 自分の住んでる町を、歩いて、よく見て、知ることが大事だと思います。環境活動って一つ一つは地味ですよ。富士山の清掃も最初はそうでした。しかし、今はほとんどごみが無くなりました。活動を続けながらいろいろな所で訴えていますと、輪が広がっていくんです。

環境の「環」という字は、読み方を変えたら「わ」ですよ。現場の僕からすると、環境の「環」の「わ」というのは、「人と人の環」なんだなと思っていて。自分一人ではできないので。ただ、自分がやりながら、多くの人に声を掛けてみんなでやっていると、大きな環になるんじゃないかな、なんて思っています。

藤井 「人と人の環」、すてきな言葉ですね。今日はありがとうございました。



野口 健

アルピニスト。昭和48年、アメリカ・ボストン生まれ。平成11年、25歳で7大陸最高峰世界最年少登頂記録(当時)を達成する。エベレストや富士山の清掃登山、地球温暖化問題など、幅広く活躍している。